

LOVE

ソ連邦からロシアへ・政情不安の中 モスクワへのバレエ留学を果たして



日原永美子さん

真夏のバルセロナオリンピック発信の熱いニュースの中に、EUN(旧ソ連合同チーム)の目を見張る活躍があった。「ステート・アマのハングリー精神」などと、揶揄する向きもあるようだ。しかし練習の時間や場所も満足になく、出場さえ危ぶまれたことを考え合わせると、それだけではないようにも思われる。

とりわけ、体操・新体操は他の追従を許さない。あの美しさ、芸術的表現の豊かさは奥深い伝統文化に支えられて初めて与えられるものだ。そこに、ロシア・クラシックバレエがある。バレエは西欧に生まれ、その最も正統的で純粋な形がロシアに受け継がれ、育まれた。度重なる政治的・社会的な嵐にみまわれながら、文字どおり「クラシック」として現代に生き抜いて来たものである。

ボリショイ・バレエ・スクール(モスクワ・アカデミー・舞踏学校)は1773年の設立。220年の歴史と伝統がある。200年前といえば、日本では江戸時代の中期。『おろしや国酔夢譚』の頃である。ロシアにとってのバレエは、日本では歌舞伎にあたるだろうか。舞踏芸術は最も尊敬される芸術の一分野である。

そのボリショイ・バレエ・スクールに昨年9月より約1年間の留学を果たした日本の少女がいる。日原永美子さん。東洋英和女学院高等部1年生である。まさに革命騒動の真っ只中。いかに伝統のある舞踏学校といえども、存亡の不安はないのか?1000人の教師と600人の生徒に食べさせるパンはあるのか?送り出す親御さんの心配も一通りのものではないだろう。

日原さんとお話した。伺った。

——バレエを始めたのはいつ頃ですか。

永美子：私はよく覚えていませんが、2才頃やりたいと言いつ出したそうです。

母：「どうして」と聞くと「お姫様になりたいの」と。3歳になって門を叩いたのが、東京バレエ団所属の田中洋子先生のところでした。スキップしたり走り回ったりの楽しい遊びから、いつしか厳しいレッスンをうけるようになって行きました。

永美子：ロシア・バレエ・インスティテュートに推薦されたのが中学一年生。この頃から段々ロシアの踊りに興味をもつよう

になりました。向こうからの先生方とっても熱心で、とくに芸術面を大変重視していらっしゃいました。

——そのロシア・バレエ・インスティテュートにボリショイ・バレエ・スクールへの留学制度があった訳ですね。やはり本場にいかねばと?

母：そうですね。私も西欧の音楽をやっていますので、本当にやるのであれば、やはりその土地に行かなければダメだっという意識が非常に強いですね。音楽でいえば、どんな景色の中でどんな花がどんな風に吹かれていて、その曲が生まれたのかってことは、体験しなきゃ絶対にわかりませんよね。

父：それはそうだが、フランスやイギリスではいかなのかと、私は思いましたね。

母：本人はロシア以外には考えていなかったんです。でも留学が決まって、その準備の真っ最中にあのクーデター騒ぎでしよう。あわてました。一度は諦めかけたんです。そしたらこの人が喜びまして。(笑)

父：ハハハ。なにしろ、本心は最初から反対でしたからね。ロシア関係の会社などに聞くと、もう家族は帰してるとか……。これで行かないですむと。(笑)

母：ところが4日後に、「学校は全く大丈夫だから、そちらがよろしければいらっしゃい」とのファックスが入りました。

——留学生活はいかがでしたか。

永美子：あちらの国立のバレエ学校はまず身体チェックがとっても厳しくて、身体的条件がバレエに向いている子しか採りません。そして健康診断と勉強。本当に選りすぐりの優秀な子達ばかりが揃っていました(年に2000人以上の応募があり、入学が許されるのはわずか90人)。それだけに、ボリショイ・バレエ・スクールに入っているというだけで、もう特別視されるという感じでした。

私の場合は、朝9時からクラシックのレッスン。その後ロシア語の勉強。食事と昼休みがあって、午後は民族舞踊、デュエット、バリエーションの3つのいずれかのレッスン。コンサートや試験の直前ともなると午後のレッスンが大はばに増えてそれはもうかなりハードでした。それに緊張感と熱気も相当なものでした。

——政情不安の時期でしたが、不自由はありませんでしたか。



永美子さん、
ご両親とお姉さん

永美子：中に入ってしまうと何も感じませんでした。ただ、買い物に出かけたときに、もうズラッと並んだ列々。皆、本当にイライラしている感じでした。レジの人なんかも、生活に疲れちゃってるというか、実に愛想が悪いんです。

寮の食事も、それはひどいものでした。朝はお粥と紅茶だけ。あってもパンとバター。昼はスープに芋かご飯、それに小さなお肉。夜は芋かご飯に、またあのお肉。それも質がとっても悪いんです。生徒達は成長期ですから、あれだけでは体を壊しちゃうんじゃないかと思いました。

父：暮れに一度帰って来たんですが、そのときは本当にびっくりしました。ムーンフェイスと言いたいほど、顔がはれていたんです。9月以来、青い野菜を見たことがないという位だから、一種の栄養失調なんですね。これは大変だと思いましたよ。

母：私も今度は行かなくてもいいのよと言いました。体を壊したら元も子もないだし、またヨーロッパへでも切り換えればいいんだからって。

ところが本人は「いいや。楽しい。そんなことは問題じゃない。だから食べ物を持たせてください。」と、こうなんです。3週間の休暇後の荷物はバレエ用品と最低限必要な冬の衣類の他、全部乾燥野菜を中心とする食糧だったんです。成田から出発する時の顔は本当に晴れ晴れとして、胸を張っていました。親としてああいう晴れやかな顔を見ることはめっ



舞台の永美子さん

たにないことだと思いましたね。

——ご両親としては帰って来られるのが待ち遠しかったでしょうね。

母：もう1週間も前から大騒ぎでした。そわそわして。いつ帰る、いつ帰るって。(笑)

父：命があって帰って来てくれたら、めっけ物だと思っていましたよ。それにロシア語も身についたようですし、これは大きな収穫だったと思います。

——8月7日に、帰国後初の発表会がありましたね。舞台の永美子さんはいかがでしたか。

父：やはりたくましくなったと思います。踊りも安定しているようです。

母：技術的には勿論ですが、目線の配り方等、表現力も豊かになったように感じます。これはロシアでレッスンの合間に本場の舞台の公演を沢山見て来たからだだと思います。

あれほど堅固に見えたソ連邦が解体してからもうすぐ一年を迎えようとしている。様々な民族の自立の火の手が上がり、レーニン像等が怒号の中で撤去されるニュースは、まだ記憶に新しい。混乱と紛糾はまだ続くだろう。混乱の中から何が消え去り何が残るのか、いかなる新生があるのか、まだまだ解らない。

(敬省略)

<お知らせ>

日露医学医療交流財団

1992年4月24日をもって、設立された日露医学医療交流財団は、医療専門家の相互派遣を含む技術協力、資材の提供、プライマリ・ケアの分野の協力、ハードからソフトまでの医療協力などにより、ロシアとその周辺諸国の人々へのよりよい医療サービスを目的としている。理事長に元外務大臣の中山太郎氏、理事、評議員に医学界から財界のそうそうたる顔ぶれ。

9日18日から26日にはモスクワ及びシベリア地方のクラスノヤルスクへ調査団を派遣の予定。医療設備、保険制度を中心に調査し、また、シベリア・トムスク方面の環境汚染の実態も視察する。更に、本年度後半には学術交流や医学研修生の受け入れが決定している。

日露医学医療交流財団の事業内容は次の通り。

1. 医療専門家の交流
2. 国際シンポジウムの開催
環日本海医学医療交流機構を考える。日露医療臨床システムと医療管理システムの比較。極東地域における救急医療を考える。公衆衛生と環境問題。小児科医療。長寿社会の医療保険問題。
3. 日露医療交流セミナー
4. 出版物の発行
5. その他

問い合わせ先 日露医学医療交流財団

〒100東京都千代田区永田町2-10-2 TBRビル1104号室
TEL:03-3592-0070 FAX:03-3592-0088